

「百周年に向かって」

主任司祭 晴佐久昌英

高円寺教会創立 75 周年の記念ミサ並びに記念親睦パーティーが無事終わり、今は感謝の気持ちでいっぱいである。当日遠くから来て下さった大勢の方々をはじめ、この 75 年間に高円寺教会のために奉仕をして下さった全ての人々、そしてこの日のために細かい準備をして下さった皆さんに、心より御礼申し上げます。そして全信徒の皆さんには、あらためて「さあ、百周年にむかって出発しよう」と呼びかけたい。

教会は、神の愛の目に見えるしるしである。それは、高円寺教会を見れば神がいかにか神の子たちを愛しているかが見える、ということである。75 周年記念の一日は、まさにそれを目の当りにする感動体験だった。なかでもあの日ばかりたちが確かにこの目で見たのは、信仰が確実に受け継がれていく教会の姿、すなわち、歴史を通して働かれる神の愛だったのではないか。

あの日共にミサを捧げた人たちはまさしく過去と未来をつなぐ人たちだった。教会創立間もないころからずっとこの教会で信仰を守ってきた人の隣に、ついひと月前に受洗した人が座っている。この教会で召命を育てこの聖堂で助祭叙階をした司教が、初聖体を受けたばかりの子どもにご聖体を授けている。この教会で長く主任を務めた司祭と、その頃中高生で今は神学生となった二人が同じ祭壇に立っている。よく見れば今は亡きあの人この人もいたはずだし、耳を澄ませばこれから生まれてくる人たちの歌声すら聞こえたはずだ。あの日のミサは、いつにもまして永遠の香りの立ち上るミサだった。

パーティーの席上、司教様に今年の受洗者の写真をお見せしたら、しみじみとごらんになってから、ふと、こうおっしゃった。

「百周年の時に、皆集まれるといいですね」

その日は間違いなく、来る。その頃は彼らも既に受洗 25 年、二人の神学生は司祭銀祝間近、今回の侍者の中の誰かは新司祭かもしれない。そんなよろこびの日、どんな聖堂でどんなミサが捧げられるのだろう。生きていれば 71 歳の晴佐久神父は、挨拶できっとこう言うはずだ。

「さあ、二百周年にむかって出発しよう」

キリストの教会は、永遠の教会である。